

# 戦前昭和期の地域産業構造の変化(Ⅰ)

—— 岡山県と岡山市の場合 ——

下 野 克 己

## 目 次

1. はじめに
2. 岡山県の産業構造の変化
  - 1) 産業部門別構成の変化
  - 2) 主要工業製品別の変化
  - 3) 主要工業業種別の変化(以上 本号)
3. 岡山市の産業構造の変化
4. むすびに

### 1. はじめに

本稿の目的は、戦前昭和期における岡山県の産業構造の特徴と変化および岡山県内部で中心的地位を占めていたと思われる岡山市の産業構造の特徴と変化とを『岡山県統計年報』と『工場統計表』とに基づいて明らかにしようとするものであり、行政区域としての岡山県および岡山市がこの時期にそれぞれ厳密な意味で一つのまとまった地域経済圏域を形成していたかどうかについては、さしあたりここで検討するつもりはない。

ところで、戦前昭和期の岡山県の産業構造についてはすでに神立春樹氏により「戦前期岡山県の産業構造」〔岡山大学産業経営研究会研究報告書第14集『岡山県の産業構造——岡山県産業構造の特質と課題(中間報告書)』所収、

1980年]が著されている。氏はそこで、『昭和九年 工場統計表』などに基づきながら、1934年(昭和9)頃における岡山県の産業構造の特徴を当時の日本全体の産業構造と対比させつつ明らかにしている。その特徴を整理してみると次の三点のようになる。第一に、岡山県は産業別就業人口(1930年に農業が58.0%を占め工業は13.6%)と農工生産額構成(1934年に農業が29.9%で工業が70.1%)において(主要工業府県と大差があることは勿論のこと全国平均と比較しても)農業県的色彩の濃厚な県であった。第二に、岡山県は重化学工業のウェイト(1934年に窯業を含んだ生産額で24.9%にすぎない)が全国平均(同年に50.0%)にもはるかに及ばない軽工業県であり、かつ紡織工業のウェイト(同じく紡績と織物で生産額の47.8%を占める)が高くこれに人造絹糸(同8.1%)と裁縫品(6.7%)という関連産業を含めると(4.3%の製糸も加えると66.9%と工業全体の三分の二を占めており)まさしく繊維工業県とよぶことができる県であった。第三に、1戸あたり耕作面積はかなり小さい(1934年に77 aで全国平均の1.07 haにかなり及ばない)が農家経営に結びついた副業的農産加工業(麦かん真田、製糸、薬製品、畳表、花むしる・ござなど)の広汎な展開がみられる県であった。

本稿では主として『岡山県統計年報』に基づいて検討し『工場統計表』は一部補足的に利用するに過ぎないこともあり、上記の神立氏の三点の結論についてはさしあたり前提的な解明事項として位置付けておき、1925年(大正14)から1940年(昭和15)にかけての戦前昭和期における岡山県と岡山市の産業構造の特徴と変化をそれ自体として整理・解明することを中心的課題と考えていることを述べておいて本論に入っていきたい。

## 2. 岡山県の産業構造の変化

### 1) 産業部門別構成の変化

表1は1925年(大正14)から1940年(昭和15)における5年毎の岡山県の

産業部門別の生産総価額の推移を各年次の『岡山県統計年報』に基づいて整理したものである。同書での産業部門別生産物分類は、農業(農産物)、蚕業、畜産業(畜産物)、水産業(水産物)、林業(林産物)、鉱業(鉱産物)、工業(工産物)となっており、蚕業の中には製糸業による生産物(例えば生糸なども)が全て含まれているし、水産物の中には製塩業による食塩が含まれ、林産物の中には製材業による加工用材(例えば板類なども)が含まれている。生糸・食塩・加工用材の生産額の合計は後に表3をあわせて見ればわかるように各年次の岡山県の工産物全体の10%前後を占め(それぞれが属している産業部門では40~80%程度を占める主要生産物であるが)ており、その分だけ工業部分が小さくなり、反面で他産業部分が大きく表れていることに注意しておかねばならない。

表1 岡山県の産業部門別生産総価額の推移

産業	1925(大正14)年	比率	1930(昭和5)年	比率	1935(昭和10)年	比率	1940(昭和15)年	比率
農業	96,785,034	28.3	53,612,539	24.8	83,893,320	24.9	150,858,610	23.6
蚕業	25,343,768	7.4	15,918,683	7.4	16,734,710	5.0	24,752,176	3.9
畜産業	4,364,964	1.3	3,932,039	1.8	4,534,027	1.3	12,845,862	2.0
水産業	8,465,817	2.5	5,892,602	2.7	5,020,918	1.5	9,716,589	1.5
林産業	9,559,905	2.8	5,422,179	2.5	8,753,739	2.6	26,756,235	4.2
鉱業	2,897,435	0.8	3,116,204	1.4	4,971,118	1.5	工業と合算	
工業	194,936,980	56.9	128,418,992	59.4	212,516,260	63.2	413,299,065	64.8
合計	342,353,903	100%	216,313,238	100%	336,424,092	100%	638,228,537	100%
世帯当	1,325		787		1,194		2,276	

注) 単位は円とパーセント

出所) 各年次の『岡山県統計年報』

まず生産総価額の5年毎の推移の特徴を見ておこう。1925年(大正14)の岡山県の生産総価額を100とすると、1930年(昭和5)は63.2、1935年(昭和10)は98.2、1940年(昭和15)は186となっていて、昭和恐慌時の1930年の落ち込みが著しかったこと、1935年頃は一般に日本経済の(特に国民生活

的分野からでは) 戦前昭和期の基準とされているにもかかわらず1935年の岡山県の生産総価額は僅かとはいえ1925年を下回っていること、1935年から1940年にかけての増加は大変顕著であったことなどが明白であった。

産業部門別に見ると、蚕業と水産業のように1930年と1935年に1925年の60%前後に落ち込んでいて1940年でも1925年と価額では大差ない状態に低迷していたものや、畜産業や林産業のように1930年と1935年に後退と停滞が確かであったものの1940年には1925年の3倍近い状態まで価額を増加させているものがあるが、何といても基幹産業の位置にあった鉱工業(1940年が合算されているので一緒に扱う)と農業の生産価額の推移は注目される。鉱工業も他産業と同様に1930年には66.5と1925年の三分の二に落ち込んでいるが、1935年には110と最も早い回復ぶりを示して1940年には209と少しではあるが2倍を上回っていたのである。それに対して、農業は1930年には1925年の55.4と最も大きな落ち込み振りを示し、1935年と1940年でも86.7と156というように蚕業や水産業ほどではないにしても全体的な生産の回復・発展のテンポには及ばなかった。その結果農業は産業全体の中での比率が4.7%小さくなったので、逆に7.9%も大きくなった鉱工業は農業との対比で1925年の2.04倍から1930年の2.45倍、1935年の2.59倍、1940年の2.74倍へと次第に差を拡げていった。つまり戦前昭和期の岡山県においては、やはり農業に対比して鉱工業(特に工業)の生産価額の増加ぶりが顕著であった。

表2はこうした岡山県の産業活動の中で重要な位置を占めている会社企業の数と資本金額の推移を見たものであり、会社種類別と営業産業部門別と資本金規模別とを便宜上一つの表としており、比率もそれぞれの中で占める数字である。会社種類別に見ると、1935年に最も多くなっている合資会社と株式会社とが会社数では双壁をなしているように見えるが、資本金額では株式会社全体が全体の90%以上を常に占め圧倒的に大きくなっている。合名会社や1940年に登場している有限会社は会社数では10%以上あっても、資本金額では1940年でさえ合わせて3%と小さかった。

表2 岡山県の会社の推移(種類別, 営業別, 資本金別)

項目	1925(大正14)年	1930(昭和5)年	1935(昭和10)年	同比率	1940(昭和15)年
会社数合計	6 9 1	8 6 6	1, 1 5 1	100.0	1, 1 2 6
資本金合計	124,078,802	181,317,339	200,245,979	100.0	264,159,926
株式会社数	3 8 2	3 9 4	4 3 8	38.1	5 0 5
◇資本金額	115,161,650	168,358,200	183,986,354	91.9	241,809,785
合資会社数	2 2 6	3 7 2	5 9 3	51.5	4 3 8
◇資本金額	6,701,409	10,341,689	12,448,125	6.2	14,023,916
合名会社数	8 3	1 0 0	1 1 4	9.9	1 1 3
◇資本金額	2,215,743	2,617,450	3,811,500	1.9	4,335,225
有限会社数	—	—	—	—	7 0
◇資本金額	—	—	—	—	3,991,000
農業会社数	9	4	5	0.4	3
◇資本金額	305,100	146,000	1,109,000	0.6	605,000
水産会社数	—	2	3	0.3	2
◇資本金額	—	720,000	760,000	0.4	740,000
鉱業会社数	3	2	9	0.8	8
◇資本金額	125,000	115,000	500,000	0.2	767,000
工業会社数	3 6 0	2 3 8	4 0 1	34.8	3 5 8
◇資本金額	88,788,969	78,168,365	139,680,362	69.8	89,395,060
商業会社数	2 6 3	5 4 3	6 2 1	54.0	6 0 9
◇資本金額	23,602,963	88,097,801	43,631,477	21.8	155,121,696
運輸会社数	5 6	7 7	1 1 2	9.7	1 4 8
◇資本金額	11,256,770	14,070,173	14,565,140	7.3	17,531,170
5万円未満	3 6 1	5 1 3	8 0 2	69.7	6 2 2
◇資本金額	5,428,252	6,770,439	9,235,579	4.6	8,718,866
5万円以上	9 8	1 4 2	1 3 2	11.5	1 9 5
◇資本金額	5,590,550	7,918,050	7,633,550	3.8	11,519,710
10万円以上	1 7 8	1 5 6	1 6 4	14.2	2 4 9
◇資本金額	31,817,500	27,994,350	28,161,350	14.1	42,170,850
50万円以上	5 4	5 5	5 3	4.6	6 0
◇資本金額	81,242,500	138,634,500	155,214,500	77.5	201,750,500

注) 単位は社, 円, パーセント  
出所) 各年次の『岡山県統計年報』

また営業産業部門別で見ると、会社数で1925年には全体の過半数を占めていた工業会社が1930年に27%に急減したため、1935年と1940年では全体の三分の一くらいを占めるにすぎなくなった。これに対して商業会社は1925年から1930年にかけて逆に2倍以上に増加し、それ以後全体の過半数を占めるようになった。資本金額でのこの両者の優劣は5年毎に交替しているが、1940年の結果としては1925年に対して6倍以上になっている商業会社がほとんど同程度になっていた工業会社を大きく引き離していた。前の両者とはやや差があったものの、運輸会社は会社数・資本金額とも5年毎に着実に増加していた。これに対して農業会社と水産会社と鉱業会社は会社数・資本金額とも小さいままであった。

資本金規模別に見ると、会社数では全体の過半数を占めていた5万円未満の小規模会社は資本金額ではわずか5%以下しかなく、逆に会社数ではわずか5%程度の50万円以上の大規模会社は資本金額で10%も比率を増加させて全体の四分の三以上を占めていた。また50万円以上の大規模会社の資本金額は順調に増加していったのに対して、その他の部分ではいずれも増減を繰り返していた。

## 2) 主要工業製品別の変化

表3は岡山県の主要工業製品の生産価額の推移を示したものである。この時期の『岡山県統計年報』には生糸(製糸業生産物)・食塩(製塩業生産物)・加工用材(製材業生産物)が蚕業・水産業・林産業など他産業分として掲載されていたり、人造絹糸やステープル・ファイバーの化学繊維(化学工業生産物)が全く掲載されていなかったりという問題点はあるものの、当時の岡山県の主要工業製品はおおむね含まれている。表3では1925年の生産価額百万円以上の25品目を順にならべ、そのほかに25品目以外で1940年に百五十万円の生産価額のもの7品目を順にならべて追加するとともに、上記の生糸・食塩・加工用材を検討の必要上付けた。また該当の年の数値の欠けている造船・煉

瓦・農具類・食塩は判明している年の数値を補足した。顕著な動向を示している製品を見ておくと、1930年から織布兼営工場分の紡績綿糸が除外されて第1位であった紡績綿糸が著減したためであろうが1925年に第2位であった織物が1930年以後ずっと第1位になっていること（織物内部での主要製品については次の表4で検討する）、1925年には20位以下であった洋服類と鉄工器具機械は急速に成長して1940年には共に5位以内（造船・煉瓦の数値が判明しても）にあったこと、工業用薬品と1940年の数値が不明のため不十分にしか検討できないとはいえ造船と煉瓦も同様に急成長していること、下位の方では農具類・セメント・飴の成長も注目されること、農産加工製品では取卸薄荷と真田紐類が大きく後退しているのに対し花むしろ・ござと畳表とのいぐき製品は堅実な伸びを示していること、1925年には第4位にあった足袋は1940年には地下足袋が含まれてかなりカバーされていたのであるが年々の後退は顕著であったこと、絹撚糸を中心とした撚糸・絹糸も同様に顕著に後退していることなどは看過できない。

『工場統計表』（および『工業統計表』）を援用したり他産業分として掲載されていた生糸・食塩・加工用材も含めてこの期間の岡山県の主要工業製品の上位品目を見てみよう。第1位から第5位にあった品目は、1925年が紡績綿糸・織物・清酒・生糸・足袋で、1930年が織物・紡績綿糸・清酒・生糸・加工用材で、1935年が織物・紡績綿糸・人造絹糸スフ・清酒・洋服類で、1940年は織物・洋服類・煉瓦耐火物・紡績綿糸・人造絹糸スフとなっていて、繊維関係製品が中心を占めていたとはいえかなり変動が見られていた。第6位から第10位にあった品目では、1925年が機械製麦粉・花むしろござ・撚糸絹糸・取卸薄荷・醤油で、1930年が撚糸絹糸・肥料・花むしろござ・醤油・足袋で、1935年が生糸・造船・煉瓦・鉄工器具機械・花むしろござで、1940年は鉄工器具機械・造船・加工用材・生糸・清酒となっていて、やはりかなり変動が大きく見られた。その変動は総じて繊維関係製品の新旧の品目の順位交替、食料品と農産加工製品の後退傾向、重化学工業関係製品の上昇傾向であった

表3 岡山県の主要工業製品の生産価額の推移

工業製品	1925(大正14)年	順位	1930(昭和5)年	順位	1935(昭和10)年	順位	1940(昭和15)年	順位
紡績綿糸	44,464,208	①	16,914,674	②	34,574,958	②	24,527,042	③
織物	39,491,690	②	27,841,361	①	47,517,424	①	56,292,938	①
清酒	13,718,516	③	11,149,615	③	10,821,980	③	14,269,707	⑥
足袋	8,219,827	④	3,610,815	⑧	2,574,404	⑬	5,075,489	⑭
機械製麦粉	6,368,647	⑤	2,412,911	⑪	4,672,481	⑪	11,102,039	⑦
花むしろござ	6,346,372	⑥	4,043,963	⑥	5,485,459	⑧	16,792,385	⑤
撚糸・絹糸	6,233,033	⑦	4,263,547	④	5,251,802	⑩	2,386,437	
取卸薄荷	5,222,411	⑧	627,253		992,383		545,544	
醬油	5,088,293	⑨	3,629,109	⑦	2,821,412	⑭	4,079,641	⑮
肥料	3,882,046	⑩	4,184,634	⑤	5,364,078	⑨	7,113,181	⑩
畳表	3,325,644	⑪	1,726,857	⑮	3,609,097	⑫	9,205,465	⑨
造船	3,126,536	⑫	2,931,556	⑩	7,580,173	⑤	14,539,797*	昭11
菓子類	3,054,343	⑬	2,076,851	⑭	2,477,804	⑰	4,791,399	⑮
真田紐類	2,178,240	⑭	770,634		525,538		681,985	
木製品	1,999,191	⑮	1,441,923	⑰	1,891,141	⑰	5,261,417	⑫
乾燥麵類	1,894,998	⑮	959,981		1,190,886		5,226,105	⑬
印刷製本	1,872,870	⑰	2,084,910	⑬	2,615,387	⑮	2,440,654	⑳
西洋紙	1,864,908	⑱	1,514,258	⑱	1,841,387	⑳	6,137,948	⑪
煉瓦	1,780,790	⑲	2,058,166	⑮	6,669,931	⑥	7,512,184*	昭11
和紙	1,494,097	⑳	807,185		600,826		3,551,791	⑰
洋服類	1,254,789	㉑	2,156,587	⑫	10,506,156	④	30,178,839	②
ゴム製品	1,198,742	㉒	1,068,279	⑳	1,415,010		1,631,332	
鉄工器具機械	1,167,814	㉓	3,456,804	⑨	5,570,408	⑦	19,655,150	④
工業用薬品	1,069,132	㉔	1,690,507	⑰	2,918,195	⑬	10,961,511	⑧
瓦	1,062,213	㉕	561,799		657,096		829,535	
農具類	672,215*	昭3	766,933		744,568		2,575,725	⑱
セメント	169,200		139,200		956,317		2,549,068	⑲
鉛	249,191		414,533		2,364,677	⑱	2,384,696	
藁製品	660,214		547,531		549,822		2,245,731	
紙製品	63,890		430,874		1,561,933		1,916,353	
メリヤス製品	153,620		192,461		303,716		1,735,505	
缶詰	284,744		183,909		356,379		1,668,375	
生糸	9,856,412		8,010,220		9,376,612		15,399,897	
食塩	3,623,383		3,060,145		2,169,786		2,482,479*	昭13
加工用材	4,540,751		4,809,365		4,121,610		15,645,382	

注) 1925年の百万円以上の品目に1940年の百五十万円以上の品目を追加。紡績綿糸は織布兼営工場のものが1930年から除かれている。紡績絹糸(1925年4,342,190円)は撚糸と合算されている。生糸・食塩・加工用材(除丸材)は他産業掲載分。\*印はそれ以前または以後が不明となっている。

出所) 各年次の『岡山県統計年報』



といえよう。

表4は表3でこの時期いわば最大の生産価額を示し続けた工業製品であった織物を、その製品種類別の動向として見たものである。ずっと最大の比率を占めていた広幅綿織物がそれまでの80%台から1940年にいっきょに56%になったこと、それは主としてステープル・ファイバー織物が1940年に25%を占めたことによること、そのほかに絹系織物と人絹織物も1940年には合計で12%を占めていること、小幅綿織物は価額・比率とも一貫して減少していること、広幅・小幅・特殊の綿系織物の合計は比率では一貫して減少を続け、特に1940年にはそれまでの97~98%から61%へと急減している。1940年には合計で10%をこえたとはいえ概して綿以外の天然繊維織物の比率が極めて小さかった岡山県では、この綿系織物の比率縮小の最大の原因は昭和10年台における化学繊維(人絹とス・フ)織物の急増にあったといえよう。

表4 岡山県の主要織物製品の推移

織物製品種類	1925(大正14)年	1930(昭和5)年	1935(昭和10)年	1940(昭和15)年
織物価額合計	39,491,690	27,841,361	47,517,424	56,292,938
広幅綿織物	32,898,096	24,609,426	41,766,222	31,466,793
小幅綿織物	4,769,494	1,889,494	1,671,759	824,843
特殊織物	1,191,812	859,369	2,683,251	1,991,099
絹及絹交織物	497,271	140,410	1,396,192	4,557,189
麻及麻交織物	8,596	8,406	—	1,364,461
毛及毛交織物	126,421	334,256	—	—
人絹織物	—	—	—	2,260,245
ス・フ織物	—	—	—	13,828,308

注) 単位は円

出所) 各年次の『岡山県統計年報』

表5は岡山県の主要工業製品の1925年から1940年にかけての生産状態の推移を示したものである。生産価額についての検討は既に表3の部分で検討し

たのでここでは少なめとし、工場数ないし製造戸数と職工数の推移を中心に表に掲載できなかったことも含めて見ていこう。紡績綿糸では生産価額は1925年が最も大きくなっているが、生産数量では1929年(昭和4)に綿布製造と直接結合している2工場分が除外されたにもかかわらずその後(例えば1935年)もっと多くなっている。しかし、1929年に前年と比較して2工場減った工場数がいしてゆるやかな減少を示しているのに対し、職工数の場合は1930年に昭和恐慌の影響で前年の三分の二になったり、1935年から1940年にかけて半分以下(これは戦時経済体制の影響であろうが)になったりしており、大きな変動を示しつつ減少していつている。岡山県の織物製品の中心的部分を占めていた綿織物では1930年の機業戸数の増加を除いて生産価額・機業戸数・職工数とも比較的類似した推移を示していたが、1930年に機業戸数が増加しているのは織機10台以上50台未満層の機業戸数の急増によるものであり織機10台未満層の機業戸数は一貫して減少している。撚糸・絹糸では岡山市にあった絹糸紡績(絹撚糸)工場の占める比率が大きいが、1940年を除いてそれほど強く表れていないのは撚糸の主力部分を占めていた児島郡の数値で相殺されたためでもある。これら紡織工業製品においては1930年の落ち込みの際は撚糸・絹糸の動向がこととなっていたが、1940年の後退は3製品とも顕著に表れていた。

裁縫品関係では足袋の衰退傾向と洋服類の発展傾向とがまったく対照的である。1940年の生産価額では40%近くを占めた地下足袋の寄与により足袋の回復は過大に表現されているが、製造戸数と職工数では地下足袋を含めてもその衰退ぶりには歯止めがかからなかった。それに対して洋服類(1940年には洋服・労働服・学生児童服・婦人子供服と分けて掲載してあったが合計した)の発展ぶりは、1930年の昭和恐慌も1940年の戦時経済体制もブレーキとならず生産価額・製造戸数・職工数のいずれも急速に増加している。

食料品関係では清酒と醤油の醸造業製品が停滞もしくは後退傾向であるのに対し機械製麦粉は発展傾向を示しているといえよう。機械製麦粉の動向の

表5 岡山県の主要工業製品の生産状態

年次	1925(大正14)年	1930(昭和5)年	1935(昭和10)年	1940(昭和15)年
紡績綿糸価額	44,464,208	*16,914,674	*34,574,958	*24,527,042
◇ 工場数	12	織布直結 11	11	9
◇ 職工数	11,273	分除外 6,030	8,418	3,974
綿織物価額	37,667,590	27,358,289	46,121,232	34,282,735
◇ 機業戸数	263	290	321	191
◇ 職工数	9,981	8,864	10,355	7,431
清酒価額	13,718,516	11,149,615	10,821,980	14,269,707
◇ 醸造場数	450	381	330	312
◇ 職工数	2,715	2,500	2,277	2,031
足袋価額	8,219,827	3,610,815	2,574,404	5,075,489
◇ 製造戸数	211	139	93	87
◇ 職工数	2,022	1,819	1,981	1,483
機械麦粉価額	6,368,647	2,412,911	4,672,481	11,102,039
◇ 製造戸数	294	243	281	368
花むしろござ	6,346,372	4,043,963	5,485,459	16,792,385
◇ 製造戸数	4,964	7,211	6,132	3,379
◇ 職工数	9,333	10,866	8,484	5,880
撚糸絹糸価額	6,233,033	4,265,547	5,251,802	2,386,437
◇ 製造戸数	137	259	274	239
◇ 職工数	2,154	2,203	2,575	951
醬油価額	5,088,293	3,629,109	2,821,412	4,079,641
◇ 製造戸数	608	503	462	445
◇ 職工数	1,194	1,254	1,233	1,196
肥料価額	3,882,046	4,184,634	5,364,078	7,113,181
◇ 製造場数	96	23	23	29
畳表価額	3,325,644	1,726,857	3,609,097	9,205,465
◇ 製造戸数	8,912	8,105	8,452	6,919
◇ 職工数	9,654	9,589	10,038	8,304
造船価額	3,126,536	2,931,556	7,580,173	*14,539,797
◇ 製造戸数	80	78	81	昭和11 86
◇ 職工数	1,615	2,421	3,734	4,909
煉瓦耐火物類	1,780,790	2,058,166	6,669,931	*7,512,184
◇ 製造戸数	25	40	41	昭和11 40
◇ 職工数	902	1,183	2,518	2,800
洋服類価額	1,254,789	2,156,587	10,506,156	30,178,839
◇ 製造戸数	233	352	572	1,404
◇ 職工数	799	1,327	4,134	15,002
鉄工器具機械	1,167,814	3,456,804	5,570,408	19,655,150
◇ 製造戸数	224	284	375	396
◇ 職工数	698	3,009	4,663	3,274

注) 各年次の上位十品目(取卸薄荷は除く)による。  
出所) 各年次の『岡山県統計年報』

特徴としては、1925年に40%程度であった国内原料がその後増加して1935年には90%以上を占めていることと、製造戸数では僅か1～2ヵ所の岡山市が生産高の圧倒的な部分を占めている（つまりその他の郡市の製造所は極めて小規模なものばかりである）ことが目立っていた。清酒と醤油の醸造業製品は一時的な回復も見られるものの、醸造場数あるいは製造戸数の動向に明確なように後退傾向は覆い隠せなかった。

農産加工のいぐさ製品の花むしろ・ござと畳表は当然ともいえるが両者が似た動向を示している。生産価額では1930年の落ち込みは大きい製造戸数と職工数はそれほど減少しない（花むしろ・ござではむしろ増加している）、しかし1940年では生産価額は3倍程度にも増加したが製造戸数と職工数は明確に減少していた。それ以上に両者の注目すべき特徴としては、それ以外の主要工業製品（洋服類も含めて）と比較して著しく製造戸数が多いこととその製造戸の平均職工数がずっと2人以下という顕著な零細性を示していることである（これに似たような零細性は醤油製造業にも見られるが、洋服類や鉄工器具機械では徐々に平均職工数が増加している）。

最後に肥料・造船・煉瓦耐火物類・鉄工器具機械の重化学工業関係製品について見ておこう。肥料は1925年の96ヵ所の営業者が1930年に23ヵ所の製造場数となっており、小規模な動物性および植物性肥料の製造業者が激減したかあるいは集計方法の変化であろうと思われる。生産数量と生産価額の圧倒的な部分は礦物性肥料・調合肥料および化成肥料が占めており、それは小田郡と児島郡に集中していたが生産価額では1930年にも落ち込まず着実に増加していた。造船は1930年に少し減少しているが、職工数で見るとは一貫して順調に増加している。隻数ならばその他の船舶が圧倒的で発動汽船の隻数も比較的多いが、生産価額の90%以上は隻数で僅か2%前後の汽船が占めており、それは児島郡に集中していた。表5では1940年の数字は判らないが『工場統計表』などを見ても増加傾向は明確である。窯業製品である煉瓦耐火物類は岡山県では主として鉄鋼業などの金属工業や化学工業の生産装置類

(炉など)に用いられる耐火煉瓦がほとんどを占めていた。生産価額のみならず製造戸数も職工数も減少することなく(1940年でも)着実に増加していた。鉄工器具機械は1925年には表5の14製品の中では生産価額ばかりでなく職工数もビリであったが、両者とも(製造戸数も同様であるが)着実に増加して上位の多くの軽工業品を凌いでいった。このように肥料・造船・煉瓦耐火物類・鉄工器具機械の重化学工業関係製品と洋服類の生産価額と職工数は1925年には表5の低位を占めていたが、その後の着実な増加によって停滞ないし減少傾向の上位の軽工業品をどんどん凌いで1940年ではいずれもかなりの上位を占めるようになっていた。

### 3) 主要工業業種別の変化

表6は岡山県の職工5人以上使用工場の主要工業業種別の私設(民間)工場の工場数と従業者数の1925年から1940年にかけての推移を示したものである。年次によって集計分類に変化があるなど問題もあるが、主要な業種は大体判明している。この期間に成長の著しい裁縫業を含めた紡織工業が工場数では全体の30%強を占めていた状態にはそれほど大きな変化はなかったともいえるが(それでも4%余り減少)、従業者数では73.7%から41.4%へと大幅に減少している。裁縫業を除いた紡織工業で見ると、工場数では1930年の28.6%から1940年の15.6%へと大幅に減少し、従業者数では1925年の68.7%から1940年の28.1%へとさらに大幅に減少している。紡織工業つまり繊維関係工業では、紡績業・製糸業の後退や織物業の伸び悩みに対して裁縫業の成長ぶりが目立っていた。

紡織工業について工場数が多いのは食料品工業であるがそれは主として醸造業によるものであり、従業者数の主要部分も醸造業が占めていた。しかし醸造業はほとんど停滞的な状態にあり、それ以外の部分も最後の5年間とはともかくとして目覚ましい伸びを示したわけではない。印刷及び製本業は工場数のみが増加していれば零細規模化がみられるのに対して、製材および木製

表6 岡山県の主要業種別の推移（私設工場）

年次	1925(大正14)年		1930(昭和5)年		1935(昭和10)年		1940(昭和15)年	
	工場数	従業者数	工場数	従業者数	工場数	従業者数	工場数	従業者数
工業合計	1,022	37,196	1,172	36,001	1,582	52,716	2,450	68,571
紡織工業 a)	349	27,420	394	21,508	514	29,548	725	28,374
製糸	29	3,079	46	4,813	32	4,289	16	3,193
紡績	15	16,272	15	8,712	14	9,770	12	5,414
燃糸	9	77	11	182	22	374	27	233
織物	177	5,449	215	5,957	261	9,730	250	9,473
裁縫業 a)	70	1,863	58	1,342	116	4,699	342	9,104
金属工業	14	169	12	119	42	421	53	787
機械器具工業	49	1,903	75	2,769	126	5,213	232	10,105
造船	5	1,429	9	2,096	9	3,579	131	b) 7,895
農業用等 c)	7	57	9	66	17	196	27	342
窯業及び土石	45	1,239	40	1,172	59	3,019	138	7,407
煉瓦耐火物	15	867	23	965	27	2,448	48	6,222
化学工業	48	1,329	61	3,147	68	6,278	130	9,806
ゴム製造	11	245	21	1,297	20	1,859	16	1,068
人造絹糸	—	—	1	707	1	2,661	2	3,501
製材及び木製品	41	312	52	376	82	631	271	3,090
印刷及び製本業	27	525	34	592	42	573	48	557
食料品工業	358	3,047	320	2,683	338	2,917	466	4,328
醸造	256	2,139	244	1,999	252	2,072	286	2,182
電気ガス工業	6	106	12	174	13	172	4	d) 54
ガス	2	59	3	67	3	55	4	54
その他の工業	85	1,146	172	3,461	298	3,944	383	4,063
帽子製造	4	258	89	2,258	172	1,765	162	1,419
その他	5	44	32	349	54	854	154	d) 1,597

注) 職工5人以上使用工場の集計による。a) 裁縫業(被服その他の裁縫品製造業)は1940年のみでなく最初から紡織工業に加えてあり、その他の工業からは除いてある。b) 造船業の1940年の数字はその他機械器具工業の数字である。c) 農業用等とは農業、土木建築用機械器具製造業のことである。d) 1940年の電気業は電気ガス工業ではなく、その他の工業の中のその他に含まれている。  
出所) 各年次の『岡山県統計年報』

品工業では最後の5年間は別格としても一貫して工場数も従業者数も増加し続けていた。その他の工業の主力の帽子製造業は1930年に工場数・従業者数とも急増した後はむしろ零細化が進行している。

窯業及び土石製品製造業（岡山県では専ら窯業製品を生産していたが）では特に主力の煉瓦耐火物製造業の成長によって従業者数の増加が示されている。化学工業ではゴム製造業も有力であるが、工場数ではわずか1〜2ヵ所にすぎない人造絹糸製造業の1930年以後の成長が注目される。機械器具工業では従業者数の主要部分は何んといっても造船業が占めており、農業、土木建築用機械器具製造業（やはり専ら農機具類を生産していた）はあまり大きな部分を占めていたわけではない。裁縫業を除いた紡織工業の後退傾向とは反対に、機械器具工業と化学工業それにあまり大きくない金属工業の重化学工業三部門に窯業及び土石製品製造業を加えた合計で見ると、工場数では15.3%から22.6%への増加とそれほど目立ってはいないが、従業者数では12.5%から41.0%へと著しい増加を示しており、いずれも裁縫業を除いた紡織工業を凌ぐに至った。

主要工業業種別の変化については表6のような『岡山県統計年報』の記載事項のみでは不十分なので、ここでは昭和5年（1930）と昭和10年（1935）の『工場統計表』および昭和15年（1940）の『工業統計表』から岡山県の主要工業業種別に常時5人以上の職工を使用する工場分を整理して工場数・職工数・生産価額を示した表7・表8・表9を作成して、もう少し詳しく検討しておきたい。三つの表を通じていえる特徴をまず述べておくと、裁縫業を含めた紡織工業が1930年から1940年の10年間に職工数と生産総額で工業全体中の比率を60%程度から40%程度へと三分の二に縮小しながらも依然として三つの指標ともで最大の比率をしめる業種であったこと、その紡織工業の1工場当たり職工数と生産価額との規模は他の業種のそれと比較すると決して小さくなくむしろ大きめであること、紡織工業につぐ比率を占めている業種は工場数では食料品工業とその他の工業、職工数では機械器具工業と化学工

業、生産価額では化学工業と食料品工業などとなっていること、煉瓦耐火物を主力とする窯業も金属工業・機械器具工業・化学工業とともに重化学工業に含めて合計して見ると、工場数では15.6%から22.4%へ、職工数では17.3%から41.4%へ、生産価額では20.1%から37.3%へとされており、半数にはまだかなり及ばないもののいずれも比率を大きく増加させていること、もともとそんなに大きな比率を占めていた業種ではないが印刷及び製本業が三つの指標とも停滞的で比率を半減させていることなどが目立っていた。

工場数の推移を示す表7では、織物業を中心としていた紡織工業が最大の比率を占め続けえたのは裁縫業の急速な増加によるものである（1940年では織物業を凌ぐ比率を占める）こと、食料品工業では主力の醸造業（和酒類が主）の推移とともに比率を縮小していること、その他の工業では製帽業が中心であること、製材及び木製品工業は1940年に比率を倍増させていること、若干の変動はあるものの金属工業・機械器具工業・窯業・化学工業の重化学工業関係業種はおおむね順調に比率を増加させていっていることなどが注目できよう。それらの増加傾向は1930年を100とした1940年の指数を見ると明白である。

職工数の推移を示す表8では、紡績業と織物業および製糸業を中心としていた紡績工業でそれら3業種がいずれも比率を大きく縮小していく反面、裁縫業が急増して最大となっていくこと、機械器具工業では工場数のあまり多くない造船業（大規模工場は1カ所）が職工数では主力となっていること、化学工業でもやはり工場数の大変少ない（1940年でも3カ所）人造絹糸及びステープル・ファイバー製造業が主力となっていること、窯業が主力の煉瓦耐火物の急増とともに1940年には第4位を占めるにいたっていること、その他の工業は主力の製帽業の急減に影響されて比率を半減させていること、食料品工業も主力の醸造業の比率縮小の影響が表れているもののそれ以外の部分の増加によって多少相殺されていること、製材及び木製品工業がやはり職工数でも1940年に比率を4倍増させていることなどが注目できよう。



表7 岡山県工業の業種別推移(その1 工場数)

業種	1930年	同比率	1935年	同比率	1940年	同比率	同指数
工業合計	1,169	100.0	1,579	100.0	2,450	100.0	210
紡織工業*	392	33.5	525	33.2	727	29.7	185
製糸業	46	3.9	31	2.0	16	0.7	34.8
紡績業	15	1.3	13	0.8	14	0.6	93.3
撚糸業	11	0.9	23	1.5	27	1.1	245
織物業	216	18.5	270	17.1	249	10.2	115
裁縫業*	64	5.5	118	7.5	346	14.1	541
金属工業	17	1.5	47	3.0	50	2.0	294
機械器具工業	71	6.1	119	7.5	233	9.5	328
原動機製造業	24	2.1	47	3.0	44	1.8	183
農業土木建築*	9	0.8	14	0.9	26	1.1	289
造船業	8	0.7	8	0.5	19	0.8	238
窯業*	40	3.4	56	3.5	136	5.6	340
煉瓦耐火物	20	1.7	26	1.6	48	2.0	240
化学工業	54	4.6	70	4.4	131	5.3	243
工業薬品	6	0.5	11	0.7	13	0.5	217
ゴム製品	12	1.0	17	1.1	16	0.7	133
製紙業	11	0.9	13	0.8	14	0.6	127
人造絹糸・スフ	1	0.1	1	0.1	3	0.1	300
肥料製造業	2	0.2	1	0.1	4	0.2	200
製材及び木製品	50	4.3	80	5.1	269	11.0	538
印刷及び製本業	34	2.9	41	2.6	47	1.9	138
食品工業	320	27.4	336	21.3	467	19.1	146
醸造業	244	20.9	252	16.0	284	11.6	116
製粉業	1	0.1	3	0.2	13	0.5	1300
菓子パン飴類	16	1.4	25	1.6	41	1.7	256
その他の工業*	170	14.5	292	18.5	379	15.5	223
ごご花えん*	31	2.7	42	2.7	60	2.4	194
製帽業	87	7.4	171	10.8	162	6.6	186
ガス及び電気業	11	0.9	13	0.8	11	0.4	100
ガス業	3	0.3	3	0.2	4	0.2	133
電気業	8	0.7	10	0.6	7	0.3	87.5

注) 常時5人以上の職工を使用する工場。裁縫業は1940年以外もその他の工業から除き紡織工業に加えた。農業土木建築とは農業用および土木建築用機械器具製造業である。窯業の1940年は土石工業を加えたもの。ごご花えんには野草えんが含まれている。1940年の指数とは1930年を100としたもの。

出所) 各年次の『工場統計表』または『工業統計表』

表8 岡山県工業の業種別推移(その2 職工数)

業種	1930年	同比率	1935年	同比率	1940年	同比率	同指数
工業合計	35,663	100.0	52,615	100.0	70,234	100.0	197
紡織工業*	21,941	61.5	30,366	57.7	29,438	41.9	134
製糸業	4,789	13.4	4,287	8.1	3,191	4.5	66.6
紡績業	8,712	24.4	8,417	16.0	7,116	10.1	81.7
撚糸業	1,252	3.5	254	0.5	238	0.3	19.0
織物業	5,731	16.1	11,435	21.7	8,723	12.4	152
裁縫業*	1,935	5.4	5,269	10.0	9,217	13.1	476
金属工業	169	0.5	526	1.0	803	1.1	475
機械器具工業	2,712	7.6	5,002	9.5	10,111	14.4	373
原動機製造業	237	0.7	648	1.2	797	1.1	336
農業土木建築*	62	0.2	112	0.2	380	0.5	613
造船業	2,091	5.9	3,530	6.7	6,010	8.6	287
窯業*	1,188	3.3	2,960	5.6	8,268	11.8	696
煉瓦耐火物	933	2.6	2,445	4.6	7,064	10.1	757
化学工業	2,095	5.9	5,531	10.5	9,924	14.1	474
工業薬品	89	0.2	461	0.9	728	1.0	818
ゴム製品	338	0.9	1,097	2.1	1,111	1.6	329
製紙業	463	1.3	575	1.1	787	1.1	170
人造絹糸・スフ	707	2.0	2,661	5.1	5,557	7.9	786
肥料製造業	217	0.6	200	0.4	345	0.5	159
製材及び木製品	352	1.0	571	1.1	3,087	4.4	877
印刷及び製本業	592	1.7	603	1.1	546	0.8	92.2
食品工業	2,601	7.3	2,897	5.5	3,984	5.7	153
醸造業	1,940	5.4	2,061	3.9	2,177	3.1	112
製粉業	55	0.2	60	0.1	124	0.2	225
菓子パン飴類	133	0.4	201	0.4	419	0.6	315
その他の工業*	3,847	10.8	3,989	7.6	3,861	5.5	100
ごご花えん*	361	1.0	592	1.1	540	0.8	150
製帽業	2,228	6.2	1,717	3.3	1,399	2.0	62.8
ガス及び電気業	166	0.5	170	0.3	212	0.3	128
ガス業	67	0.2	52	0.1	54	0.1	80.6
電気業	99	0.3	118	0.2	158	0.2	160

注) 常時5人以上の職工を使用する工場。裁縫業は1940年以外もその他の工業から除き紡織工業に加えた。農業土木建築とは農業用および土木建築用機械器具製造業である。窯業の1940年は土石工業を加えたもの。ごご花えんには野草えんが含まれている。1940年の指数とは1930年を100としたもの。

出所) 各年次の『工場統計表』または『工業統計表』

表9 岡山県工業の業種別推移(その3 生産価額)

業 種	1930年	同比率	1935年	同比率	1940年	同比率	同指数
工業合計	107,002	100.0	188,204	100.0	369,880	100.0	346
紡織工業*	64,012	59.8	111,386	59.2	143,897	38.9	225
製糸業	7,685	7.2	9,578	5.1	14,800	4.0	193
紡績業	24,397	22.8	45,422	24.1	45,414	12.3	186
撚糸業	1,761	1.6	410	0.2	1,284	0.3	72.9
織物業	25,214	23.6	43,216	23.0	47,393	12.8	188
裁縫業*	4,448	4.2	12,256	6.5	33,310	9.0	749
金属工業	270	0.3	833	0.4	2,614	0.7	969
機械器具工業	6,283	5.9	11,067	5.9	35,274	9.5	561
原動機製造業	1,580	1.5	1,254	0.7	2,361	0.6	149
農業土木建築*	72	0.1	223	0.1	1,922	0.5	2667
造船業	2,810	2.6	7,354	3.9	17,039	4.6	606
窯業*	2,468	2.3	7,541	4.0	33,307	9.0	1349
煉瓦耐火物	1,936	1.8	6,049	3.2	28,027	7.6	1447
化学工業	12,436	11.6	27,385	14.6	66,919	18.1	538
工業薬品	1,935	1.8	4,587	2.4	11,127	3.0	575
ゴム製品	856	0.8	2,570	1.4	4,695	1.3	549
製紙業	2,117	2.0	2,446	1.3	8,441	2.3	399
人造絹糸・スフ	2,197	2.1	11,310	6.0	22,816	6.2	1038
肥料製造業	4,176	3.9	5,152	2.7	7,138	1.9	171
製材及び木製	801	0.7	1,830	1.0	12,246	3.3	1529
印刷及び製本	1,655	1.5	1,462	0.8	1,807	0.5	109
食料品工業	13,195	12.3	16,012	8.5	40,023	10.8	303
醸造業	9,100	8.5	10,074	5.4	16,006	4.3	176
製粉業	2,063	1.9	3,464	1.8	10,471	2.8	508
菓子パン飴類	855	0.8	987	0.5	4,544	1.2	532
その他の工業*	3,528	3.3	5,772	3.1	16,031	4.3	454
ござ花えん*	321	0.3	1,780	0.9	4,133	1.1	1289
製帽業	884	0.3	639	0.3	1,209	0.3	137
ガス業*	58,397百立方米		59,664百立方米		73,582百立方米		126
電気業*	65,876千KW時		213,232千KW時		337,282千KW時		512

注) 単位は千円。常時5人以上の職工を使用する工場。裁縫業は1940年以外もその他の工業から除き紡織工業に加えた。農業土木建築は農業用及び土木建築用機械器具製造業である。窯業の1940年は土石工業を加えたもの。ござ花えんには野草えんが含まれている。1940年の指数は1930年を100としたもの。ガス業と電気業は生産価額が不明。

出所) 各年次の『工場統計表』または『工業統計表』

生産価額の推移を示す表9では、紡織業で1940年に紡績業と織物業が比率をほぼ半減させていることと製糸業の一貫した比率縮小と裁縫業の一貫した比率拡大とが対照的であること、化学工業では肥料製造業の比率縮小の反面で工業薬品製造業と人造絹糸及びスフ製造業との比率拡大が目立つこと、特に1935年にかけての急増で後者は化学工業の中心的比率を占めること、食料品工業ではやはり主力の醸造業の比率縮小の影響が見られるが製粉業や菓子パン飴類製造業などによりかなりカバーされていること、機械器具工業は主力の造船業に支えられて比率を増加させていること、窯業はやはり主力の煉瓦耐火物の急増によって急速に比率を拡大していること、あまり大きくないとはいえ製材及び木製品工業の1940年での3倍増は看過できないこと、生産価額は不明で生産量で判断せざるをえないがガス業の停滞傾向に対して電気業は好調に増加していることなどが注目される。